



# 祐介の目

昭和・平成・令和

大田ゆうすけ No.92  
(福山市議会議員)

毎月1日号に掲載

料が十分あれば負けていない」「米兵は弱かった」と語っていた。昭和の勇士達は平成の終わりまでにはほぼ全員亡くなったが、彼らは戦後の日本は米国の属国状態であるとの認識だった。

令和も平和な時代が続いて欲しい。令和26年・戦後百年目にはあの戦争も歴史となり、客観的に評価できるようになるだろう。私達戦後生まれは兵器の進化（イノベーション）に関する知識に乏しい。日露戦争の日本海海戦勝利の後に世界的に大艦巨砲主義が流行した。しかし真珠湾攻撃で日本は世界に先駆けて航空機による戦いを成功させ、戦艦大和のような大艦巨砲を時代遅れにした。第2次大戦を終結させた核兵器は戦後の核開発競争を招いたが、次の戦争が始まる際には新兵器の登場により用済みとなるかもしれない。歴史は繰り返す、その結果が念願の核兵器廃絶だとすれば皮肉だ。

令和の時代、大多数が戦後生まれになった頃に次の戦争の危機が到来すると感じる。そうならないために戦史の研究や政治家の外交努力が必要だが、最近の投票率等を見ると国民に危機意識が欠けていると強く感じる。昭和の勇士達が見たらどう思うだろうか。

私は昭和43年に生まれ昭和を20年、平成を30年生きて令和を迎えることになる。昭和は戦争の時代だった。しかし私の記憶にある戦争とは、今は無き天満屋前の歩道橋の上で白衣を着た傷痍軍人が物乞いをしていた情景ぐらいだろうか。家の近所に広大福山分校があり、駅前にあったスポーツセンターの水泳教室のコーチ（大学生）を訪ねて寮に遊びに行った。男子寮の高志寮、女子寮の清明寮いずれも歩兵第41連隊当時の建物であり、今思えば歴史的建造物であった。これらは昭和の終わりとともに姿を消した。

平成の初期、私は作業療法士として大田記念病院の老人デイケアに勤務していたが、当時70〜80代の男性の多くは戦争経験者であった。戦場という極限の体験談は興味深く「自分達はこの為に戦ったが戦後は日陰者だった」「武器・弾薬・食